

【資料】

熱田原貝塚の骨製品・貝製品

Bone Artifacts and Shell Artifacts Excavated from the Atsutabarū Shell Mound

高宮 廣衛

Hiroe TAKAMIYA

上原 静

Shizuka UEHARA

I. はじめに

熱田原貝塚は沖縄本島南部の南城市知念字志喜屋与那嶺原に所在する。本貝塚は字志喜屋集落の後方に広がる琉球石灰岩台地の東南端部に位置し、同部の地隙内に堆積した土層に形成されている。当該地は第二次大戦直後、隣接する小さな農道の拡張工事によって上半部約3mの堆積層がすでに破壊されていて、この工事による破壊が遺跡発見の端緒となった。残存の下半部も3m前後の層厚があり、出土した土器はほとんどが伊波式土器であった。したがって、本貝塚の下半部は伊波式主体の文化層と見ることが出来る。

発掘調査は1957年、高宮廣衛・C.W.Meighanにより実施された。調査の経緯や概要に関して「知念村熱田原貝塚発掘概況」(註1)として琉球政府による『文化財調査要覧』で報告されたが、出土資料の詳細については未掲載であった。そのため高宮は報告に向けて鋭意整理をすすめ、資料整理済み毎に「熱田原貝塚の貝類と獣魚骨」(註2)、「熱田原貝塚の土器」(註3)、「熱田原貝塚の石器」(註4)としてあらましを報告してきた。今回の報告もそれにつづく「骨製品・貝製品」編である。ただ、調査実施者のひとりであるMeighan博士が資料中の一部を保管していることもあり、今回掲載資料がすべてではない。

II. 資料内容

今回報告する骨製品・貝製品は計52点で、その内容は骨製品11点、貝製品41点を数える。資料の機能・用途からみると、いずれの製品にも実用品と装飾品に大別され、ともに装飾品が圧倒的に多い状況を呈する。以下、骨製品、貝製品と種類に大別し、各機能や用途別に概要を述べる。また、個別の特徴は観察表を設けて記述した。

第1表 骨製品出土一

種類	実用品		装身具					計	
	骨錐	牙骨腕輪	垂飾						
			イノシシ牙製	魚骨製	ステツク状製	サメ歯製	刷毛具形製		彫画札形製
インチ	針状(A)	ナイフ状(B)							
0~6			1						1
6~12									0
12~18							1		1
18~24									0
24~30				1				1	2
30~36	1							1	2
36~42		1							1
42~48									0
48~54	1								1
54~60									0
60~66									0
66~72									0
72~78									0
78~84						1			1
84~90		1							1
90~96									0
96~102									0
102~108									0
108~114									0
114~120				1					1
計	2	1	1	3	1	1	1	1	11

1. 骨製品

骨製品は総数 11 点出土し、その内訳は実用品と装飾品から構成される（第 1 表）。実用品は骨錐のみで、他は装飾品の腕輪、垂飾、符状製品の 3 種類からなる。

1) 実用品

① 骨錐（第 1 図 1～3）（写真 1 の 1～3）

出土資料は合計 4 点であるが、手元に管理するのは 3 点で、他の 1 点は Meighan, C.W. 博士が諸蔵するようだ。素材にイノシシ腓骨と尺骨の部位が用いられ、4 点とも一端部分を片面側を研ぎ鋭利に尖らせた製品である。形態に違いがあることから二種に大別され、第 1 図 1、2 は針状で身が細く、棒状に長くなる A タイプである。他方、同図 3 は頭部が大きく太い B タイプとして分ける。Meighan 博士の研究室に所蔵するものは写真から判断して、B タイプに属する。

第2表 骨製品の観察表

法量単位：長さcm、重量g

番号	事項	長軸	短軸	厚み	重量	出土地点
第1図 1	骨錐 イノシシの腓骨を素材にする。資料は完全形。近位部を斜めに研ぎだす。黄白色を帯び光沢がある。	10.9	0.6	0.4× 0.6	4	89,f/30-36
2	骨錐 イノシシの腓骨を素材にする。頭部を欠損、近位部を斜めに研ぎだす。黄白色を帯び光沢がある。	9.3	0.6	0.4× 0.6	3	90,c/48-54
3	骨錐 イノシシの尺骨で、左側の部位で素材とする。なお、若い獣である。器面全体に艶が落ち、白色化が進んでいる。端部の研磨は強弱があるが、両面から研ぎ出す。保存状況はやや使用のためか先端の一部を欠損する。ただし、その後の使用もあり、やや摩滅が進んでいる。	8.6	1.3	1.4	7	88,f/84-90
4	垂飾 鳥骨の長管骨を細長い札状に整形したものである。両端の一つが欠落するが、残存する側の端部には孔が一つ穿たれる。孔はすり鉢状になるもので、上縁部は0.6×0.4cmで、孔そのものは径が0.2cmと小孔である。製品の色調は白色を帯び、丁寧な研磨が加えられ、光沢がある。	3.9	0.9	0.2	1	91,d/78-84
5	垂飾 メジロザメ属のサメ歯で、形は長軸に長めの二等辺三角形を呈する。歯の根元側に近い部分に孔が一つ穿たれている。孔は0.5cmですり鉢状になる。歯は灰色をおび、光沢を放つ。	2.3	1	0.4	2	29,e/12-18
6	腕輪 魚骨を使用。平板で湾曲していることから、一見はイノシシの牙に近似する。風化のため劣化が著しいが、二つの孔が並列するように認められる資料である。	3.5	1	0.1	0.1	92,c/24-30
7	腕輪 イノシシの牙右部位である。破損が進んでいるが、一端には孔部の破損とその両側に挟りの細工がみられる。逆の端部は大きく破損している。光沢がみられるが、白色化が進んでいる。	7.9	1.4	0.7	8	44,e/114-120
8	腕輪 イノシシの牙を素材とした製品の一部である。わずかに孔部分を残すのみで、全体は残っていない。風化がすすみ白色化している。	3.2	1.2	0.2	1	63,h/0-6
9	腕輪 イノシシの牙右部位である。両端側が欠落しているが、一端側に挟りの細工がみられる。全体に光沢がみられるが、白色化している。	6.7	1.3	0.67	6	42,d/36-42
10	札状彫刻製品 ウミガメの腹甲骨板を素材にした有孔品。一見すると刷毛板の様な形を呈す。表裏面ともに滑らかで、側面も手ずれような曲面をなす。孔は長軸に二孔並ぶ。長軸の上孔は径0.4cm。下孔は径0.4cmをはかる。特徴的な点として、平面側に三本の平行する細沈線が刻まれている。長軸の広端側には楯状の切込みが施されている。ペンダントである。	4.6	2.5	0.4	8	87/h24-.30
11	札状彫刻製品 ウミガメの背甲骨板を素材にした製品で、側面に挟りや刻み付け、また、表面に二条一組とする平行沈線文を描く。全体の半分弱が欠落しているが、左右、上下対称で、沈線も三条ほどがあったものと推測される。	4.7	3.2	0.6	13	h/30-36

2) 装飾品

① 牙骨製腕輪（第1図6～9）（写真1の6～9）

形状が半輪状になるもので、イノシシの牙製品（Aタイプ）と魚の骨（Bタイプ）を素材としたものである。いずれも端部に孔や結び付けの抉り部分が施されている点から、複数をつなげて輪にする組み合わせ式の腕輪と判断される。計4点出土した。

② 垂飾（第1図4、5、10）（写真1の4、5、10、11）

形状から垂飾としてまとめた。素材や形から3種類に分けられる。

1類は小さなスティック状を呈し、一端部に丁寧な孔がうがたれているものである。

2類は平面形が二等辺三角形のサメの歯そのものを素材とするペンダントで、根元側に一孔を穿っている。表面のエナメル質は光沢がある。

3類は亀骨を素材とし扁平形で、平面形が刷毛具状に研磨加工した製品である。平面の一端に線刻と貫通する孔が2つ縦列させ、長軸の一端部側に刷毛目状の切り込みが作り出される。

③ 符状製品（第1図11）（写真1の12、13）

外観が扁平で符状を呈した製品である。半分ほど欠落しているものの、側面や平面には刻み平行する線彫が認められる。残存する部位から明らかに左右対象を意図した造形品とみられる。従来の貝符や蝶形骨製品と同系統の製品と判断される。

第3表 貝製品出土一覧表

種類	実用品			装飾品													計						
	インチ	匙	鏃	腕輪	垂飾品										その他								
		ヤコウガイ製貝匙	貝鏃		オオギガイ製											製品(不明)細片							
					オオツタノハ製	メンガイ製	シャコカイ製	アコヤガイ製	サラサバテイ製	貝製ビーズ	タカラ貝製	貝鏃模造品	パイブウニの棘製	フテガイ製	イモガイ製	キバガイ製		ツノテツレイシ製	ミニガイ製	鏢状貝製	へら状製	札状未製	アンボクシロサメ貝
0～6																				1		3	
6～12	1													1							1	4	
12～18	1	2			1																	4	
18～24																		1			1	3	
24～30				2																		4	
30～36	1				1												1					4	
36～42					1																	2	
42～48					1				1												1	11	
48～54								1														3	
54～60																						4	
60～66																					1	4	
66～72														1								3	
72～78	1	1	1	1							1	1	1									8	
78～84																						1	
84～90																						0	
90～96					1	1																1	
96～102																				1		1	
102～108																					1	0	
108～114																						1	
114～124																						2	
計	4	6	2	8	3	2	1	2	2	1	16	1	1	2	2	1	1	1	4	2	4	4	

2. 貝製品

貝製品は総数49点検出された。用途・機能を基準に実用品と装身具に大別されるが、中には破損が著しく不明なものも含まれる。実用品としてはヤコウガイ製貝匙、貝鏃、二枚貝製有孔製品である。装身具にしたものは三角形有孔品、貝輪、貝製垂飾などである（第2表）。なお、同貝製品のなかにも一部 C.W. Meighan 博士の下で保管されているものがある（写真7）。

1) 実用品

① ヤコウガイ製貝匙 (第2図1、2、第3図) (写真2の1~8)

真珠光沢を有する大形の夜光貝を素材とする匙状または柄杓状の製品である。貝の自然に湾曲する体層部を大きく取り込み、容器にしたもので合計4点得られた。製品として完成したものと未完成品があり、いずれにも残念ながら破損している。整形途中品が2点、整形途中品が2点からなる。

第4表 貝匙の観察表

法量単位:長さcm、重量g

番号	保存状況	事項	縦×横	厚み	重量	出土地点
第2図 1	完成品	受け部分は欠落し、わずかに柄の分佈を残す破片。柄の両側にはやや对象的に刻みを施している。頂部は内側に湾曲した線を描く。外面は内面に近いほどに研磨が強く加えられ、真珠の様な光沢をばなつ。	7.7×5.9	0.2	23	81,h/30-36
2	完成品	受け部分の先端で、平面形が湾曲している形状を知る破片である。外面の螺肋はなく、真珠層面が露出し、内面同様に光沢をばなつ。	9.5×7.5	0.3	47	81,e/6-12
第3図 1	完全形	碗状に受ける部分と柄の部分があるが、全体として分化が明確ではない。製作もややラフなつくりのため成形途中のものとして判断される。外面の螺肋は研磨によりとられている。	15.2×6.6	0.3	112	85,d/12-18
2	未完成品	受け部分の破損資料である。外面は製作途中のため本来の螺肋のある自然面となる。光沢は内面のみにある。破損が著しく揭示用は不明である。	6.9×6.0	0.5	37	82,c /72-78

② 貝鏃 (第4図1~6) (写真3の1~6)

平面形が三角形で扁平な貝製品が16点得られた。観察をした結果、三辺の内の二辺側に、表裏面から斜めに研ぎ出し刃を付すものと、刃縁を作り出さないものが存在した。本節では当刃縁を有無で、実用品と装飾品に大別した。実用品としたものは貝鏃と判断し、計6点認められた。素材はアコヤガイで平面形により、平面の三角形が長軸に長いものをAタイプ、他方、短いものをBタイプとする。なお、Bタイプは三角形の底辺が内湾する特徴を有する。内訳はAタイプ2点、Bタイプ4点である。

第5表 貝鏃の観察表

番号	分類	事項	長軸	短軸	厚み	重量	出土地点
第4図 1	A類	縦位に筋がはいる白色の貝を素材とする。鋭い二等辺三角形で上部に三つの孔を認められる。両側面の一つは側面を作り、他方の面は薄く凹面側から研ぎだし付刃をつくる。	4.2	1.2	0.3	1.4	3,c /12-18
2	A類	鋭い角度のついた貝製品である。風化のため器面はもろくひびが入るが、有孔品である。側面は付刃をなすように凹面側で研ぎだしている。色調は灰色で被熱を受けている可能性が高い。	4.9	1.2	0.2	1.4	64,c/64-70
3	B類	真珠の光沢がある。長軸に長い二等辺三角形。先が尖り、両側には断面が流線形のように薄く加工されている。つまり両刃状。孔は正円形。上辺は破損のためか、丁寧な仕上げではない。	3.3	1.5	0.2	1.3	8,d/12-18
4	B類	淡い桜色を帯びる。アコヤガイを素材とするのであろうか。二等辺三角形を呈する。先端を一部欠くが全体の姿がわかる。上辺は丁寧に納めていない。両辺は側面から刃に近いように両刃のごとく研がれている。2つの孔が従位に並ぶ。	2.6	1.5	0.2	1	2,f/78-84
5	B類	黄色の真珠光沢。二等辺三角形の両側には側縁側から研ぎが入り、刃のような形を呈する。わずかなひずみは見られるが、基本的には扁平。孔一つ。	2.3	1.2	0.1	0.5	4,d/54-60
6	B類	真珠光沢あり。二等辺三角形で上辺の器厚は薄く、平面形も直線的でない。両側面の面取りが強くなされ、付刃となる。孔は上辺側に一つである。	1.8	0.9	0.1	0.3	11,d/72-78



## ③ 二枚貝有孔製品（第4図7、8）（写真3の7、8）

二枚貝のオウギガイを素材したものでを用い、その殻頂部側に打割により粗孔を穿った製品である。2点出土をみている。

第6表 貝錘の観察表

法量単位：長さcm、重量g

番号	分類	事項	長軸	短軸	厚み	重量	出土地点
第4図 7	二枚貝有孔製品	オオギガイを素材とした有孔製品。名称通りの扇形をした貝で、その殻頂部に打割による粗孔を一つ穿つ。とくに貝殻縁辺部に成形された痕はみられない。内面は自然の白色を帯びる。	7.3	6	0.2	15	76,f/72-78
8	二枚貝有孔製品	オオギガイ製品。殻頂部に粗孔を一つ穿つが半分欠落する。整形、大きさなど概観含めて大方前者資料と同一である。	6.5	—	0.2	13	h/42-48

## 2) 装飾品

形状から垂飾、腕輪、その他の装飾品、不明として大きくまとめた。

## 2-1. 垂飾

垂飾は素材や形から9種類に分けられる。

## ① 貝製ビーズ（第4図9、10）（写真3の9、10）

小形巻貝を素材に、殻頂部を残しつつ半玉状したAタイプのもの、体層部を水平に切り取ったかなような円盤状にしたBタイプの2種類が存在する。

## ② タカラガイ製品（第4図11）（写真3の11）

小形のタカラガイの湾曲した背中側を取り除き、研磨を加えた有孔製品である。手触りは良好である。1点出土している。製作状況と出土量からして垂飾の一種と判断して紹介する。

第7表 貝垂飾の観察表

法量単位：長さcm、重量g

番号	分類	事項	長軸	短軸	厚み	重量	出土地点
第4図 9	ビーズ	小形イモガイの殻頂を円盤型した製品である。ことに殻頂部の外面は丁寧な平面砥磨をして孔を穿つ。内面側はとくに細工痕はみられず凹面している。孔の大きさ直径約0.24cm。器面は非常に手触りが良好である。	1.4	1.4	0.3	2	52,e/24-30
10	ビーズ	イモガイの殻頂部を円盤状にしたビード形の製品である。中央の孔は比較的大きい、直径約0.8cm。被熱を受け、黒色をおびているが当該製品も手ずれがあり、光沢がある。	2.1	1.8	0.3	2	65,/ /54-60
11	タカラガイ製品	小形のタカラガイを素材した製品。盛り上がる背面部を水平方向に削り落とすように砥磨を加えて孔を穿ったものである。器面は光沢があり手触りが良好である。	2.2	1.6	0.1	4	66,e/6-12

## ③ 貝鏃形垂飾品（第5図1～16）（写真4の12～27）

平面形が三角形で扁平な貝製品である。平面形が三角形を呈し、先に紹介した鏃と異なり、縁辺に付刃がみられないものである。また、底辺の部分が直線的なものと、やや外側に湾曲するものがみら

れる。素材は真珠光沢を有するアコヤガイで総数 16 点出土した。三角の平面には貫通する孔が穿たれているが、わずかながら無孔品もみられる。ただしこれらは整形が徹底していないところから、前者の整形途中製品と考えられる。なお孔の平面的な位置についてみると（図に示すように尖る三角部分を下に向けた場合）、製品の中央にあるもの、上辺部側にあるもの 2 種類が認められる。

第8表 貝鏃形垂飾りの観察表

法量単位：長さcm、重量g

番号	分類	事項	長軸	短軸	厚み	重量	出土地点
第5図 1	A類	真珠光沢のある製品。表裏の何方かがわに内湾するようにそりがある。剥片である。両側面に対して、上辺は丁寧ではない。孔が一つ。	2.7	1.3	0.15	0.72	17,d/48-54
2	1孔	真珠光沢あり。極めて薄い製品。二等辺三角形で上辺が不揃いである。また、やや内湾気味にそりがある。両側面への付刃はみられない。孔は一つである。	2.4	1.2	0.1	0.45	19,d/48-54
3	2孔	淡い桜色を帯びる。アコヤガイを素材とするのであろうか。二等辺三角形の先端側の残す。表裏両面を砥磨をする。側面側は両刃になるような極端な研ぎはみられない。	2.1	0.9	0.1	0.3	5,c/42-48
4	1孔	先端側が欠落、先端とは逆側が円いことから平面形がやや楕円形をおびる。側縁は付刃成形はみられず、あくまでも表裏面からの研磨になる。真珠光沢を有する。孔は一つ。	2	1.2	0.2	0.36	20,c/42-48
5	1孔	黄色の真珠光沢。完全形。二等辺三角形の両側は縁取りがなされる。ただし付刃の形はみられない。上辺はその他の部分に比べ器厚は薄い。重心は尖る側にあるのか。孔一つ。	1.8	0.9	0.1	0.31	23,e/114-124
6	1孔	先端側は摩滅のためやや平面形が円みを有する。他方、先端とは逆側は成形が徹底されていない。両側面は縁取りがなされる。ただし付刃成形ではない。表裏面からの研磨になる。真珠光沢を有する。孔は一つ。	1.2	1.1	0.2	0.51	12,e/30-36
7	欠落 不明	アコヤガイの欠片のようにあるが、全体を二等辺三角形にした貝製品である。ただし、完成品ではなく、輪郭を整えたのみで、凸面は自然貝の表皮としての褐色が残り、凹面は真珠光沢面となっている。その他の加工痕はみられない。	2.4	1.4	0.25	0.5	21,h/0-6
8	1孔	上辺部を残した製品である。孔が穿たれている。真珠光沢がみられる。側面縁取りがなされている。	1.3	1.1	0.1	0.35	16,f/42-48
9	1孔	ほぼ完全な二等辺三角で、側面の仕上げも良好。表裏面からの研磨で真珠光沢を有するが、表面は一部に自然貝面を残す。孔は一つ。	1.9	1.2	0.1	0.52	10,c/42-48
10	1孔	ほぼ完全形の資料。先端とは逆側が円く、平面形がやや楕円形をおびる。表裏面からの研磨になり、側縁は付刃成形はみられない。真珠光沢を有する。孔は一つ。	2.3	1.2	0.1	0.43	7,c/42-48
11	1孔	真珠光沢。完全形。二等辺三角形の両側は僅かに縁取りがなされる。上辺はその他の部分に比べ器厚は薄い。孔が中央に一つ。	2.1	1.1	0.1	0.61	14,f/42-48
12	1孔	孔部分をわずかに残して大きく欠落した製品である。表裏面ともに真珠光沢がみられる。	1.4	1.4	0.2	0.29	15,f/42-48
13	無孔	表面は研磨されず、内面側のみ真珠光沢を有する。無孔である以外は丁寧に二等辺三角形となる。側面も面取りがなされている。	2.1	1.1	0.1	0.48	22,f/30-36
14	無孔	表裏面とも薄い桃色で、真珠光沢はみられない。二等辺三角形で上辺が割れているかのようだが、そうではない。単に不揃いである。また、縦位にやや内湾気味にある。両側面への付刃はみられない。孔はもみられない。成形途上のものか。	2.7	1.1	0.1	0.61	13,f/108-114
15	1孔	黄色の真珠光沢。完全形。二等辺三角形の両側は縁取りがなされる。ただし付刃の形はみられない。上辺はその他の部分に比べ器厚は薄い。孔一つ。	1.9	1.1	0.1	1.08	d/72-78
16	欠落 不明	先端側の資料である。ただ平面形は二等辺三角形を推測される。両側面は面取りされ、付刃されていない。	1.4	0.8	0.2	0.27	18,e/36-42

## ④ パイプウニの棘製品（第2図3）（写真4の4）

長軸の一端に孔が穿たれ、身部には菱形模様が線刻されている。この文様は沖縄先史文化の文様の一つのパタン図案としてみていいものである。

第9表 パイプウニ製品の観察表

番号	分類	事項	長軸	短軸	厚み	重量	出土地点
第2図 3	有文	パイプウニの棒状を呈する棘を素材とする製品である。両端はいずれも欠落しているが、一端部に穿孔の跡が残る。また、表面には菱形文様に近い幾何学文様が線描きとして刻まれている。長軸の端部に破損した孔痕があり、垂れ飾りの一種とみられる。	2.6	1.1	1.1	2.87	93,h/12-18

## ⑤ フデガイ製品（第5図18）（写真4の2）

体層部を平面的に研磨を加え、平面とそれに伴う孔がみられる部分と、長軸に対して水平方向に葉研彫り状に孔を穿つ製品である。手触りは良好。器色は白色化し本来の自然色は残っていない。

## ⑥ イモガイ製品（第5図19）（写真4の3）

上記のフデガイ同様に殻頂面や殻口頂部に、さらに体層面にも研磨を加え、孔を穿つ製品である。本製品は線刻もみられる。いずれも手触りは良好。器色は白色化し本来の自然色は残っていない。

## ⑦ キバガイ製品（第5図17）（写真4の1）

筒型で中心の軸が空洞をなすもので、形状は歴史時代にみる管玉に近い装飾品である。貝の色はみられず、白色である。

## ⑧ ツノテツレイシ製品（第5図20、21）（写真4の5、6）

上記⑤、⑥と同様な製作技術で研磨を加え、有孔品とした製品である。自然貝の本来の形を残した製品類である。

## ⑨ ミミガイ製品（第5図22）（写真4の7）

小形のミミガイを利用した製品で、両端部に抉りを入れた製品と推測される。本資料は長軸の一端が欠落しているが、既報告資料（写真7の7）と同種ものとみられる。

## ⑩ 鏢状貝製品（第8図3）（写真4の11）

野球帽子の鏢状を呈していることで称している。本資料は両端部分の保存が悪く、孔の有無が明確ではないが、有孔品が本遺跡の地点を異にして出土している（写真7の8）。一つの型式となりうる貝製品である。

第10表 有孔製品の観察表

第5図 17	キバガイ 孔製品	キバガイを素材とした管状の製品。端部の直径は異なるが、貫通して、両端および表面も丁寧な研磨がなされている。狭端側に横位の刻目が四本横列している。器色は白色を呈する。管の両端で大きい側が約1cm、小さい方約0.6cmをはかる。	4.5	1.5	0.2	7	e/30-36
18	巻貝有 孔製品	小形のフデガイを素材に孔を穿つ。穿孔方法は長軸に平面的な砥磨を加えて、結果として殻側面に内部軸が見える形にしてある。また、逆面の頂部側に薬研彫り状の溝孔を穿っている。殻表面は光沢を有するが、一部に被熱のため黒色を帯びる。	5.7	2.2	0.2	15	69,c/72-78
19	巻貝有 孔製品	小形のイモガイを用い、3孔を穿つ製品である。殻口側の体層部面、逆の殻口側頂部、殻頂部面に薬研彫りのような溝による孔が施されている。殻面は乳白色で手ずれが認められる。	3	1.6	0.1	5	70,c/42-48
20	巻貝有 孔製品	ツノテツレイシの細かな角がある巻貝を採用している。殻口とは反対側側面と、殻頂部を水平方向に、薬研彫り状の砥磨を加えて、結果として孔を穿つ。合計2孔である。殻表面は手触りが良好である。	2.9	2.5	0.4	15	67,
21	巻貝有 孔製品	ツノテツレイシの細かな角がある巻貝を採用している。殻軸を中心に全体のおよそ四分の三の体層分をかきとったような製品である。色調は白色で、殻表面は手触りが良好である。	3.5	2.6	0.3	10	68,e/6-12
22	破片	ミミガイ系の孔が横列する貝を素材とする。孔の間隔は約0.6cm、殻は極めて薄い。一部の角を欠落するが、全体の姿を残すものとみられ、側面の研磨はすべて手触りが良好である。	3	1.9	0.1	1.19	25,d/18-24

## 2 - 2. 腕輪

貝製腕輪（第6図、第7図）（写真5、写真6の1～7）

貝輪とした製品は二枚貝と巻貝を用いたもので製品で、共通するのはいずれも半環状を呈し、使用においては連結紐などで組み合わせて腕輪としたものと考えられる。計16点得られた。貝輪の素材はオオツタノハ（Aタイプ）、メンガイ（Bタイプ）、シャコガイ（Cタイプ）、アコヤガイ（Dタイプ）、サラサバデイヤ（Eタイプ）の五種である。ほとんどが貝種本来にみられる色素は抜け、シャコガイ製品同様に白色を帯びている。

## 2 - 3. その他の装飾品

① ヘラ状製品（第8図1）（写真2の9、10）

アコヤガイを素材とした平面形が長方形の扁平製品である。また、内面は貝の本来みられる真珠光沢が全面にみられ、外面は逆に黒褐色の螺面になっている。ことに研磨加工はみられない。とくに著しい加工の痕跡としては、ヘラ先にあたる長軸の一端側に楕状に筋を複数入れ込んだ点である。本製品は完全形で1点のみの出土である。

② 札状製品（第8図6、8）（写真4の14、17）

シャコガイを素材にした符状製品類で、整形途中で破損したものも存在する。また、シャコガイの表面（凸面部分）を一面的に研磨を加えただけで、人工の痕跡をみせるもの大きく自然貝の形を留

めた資料である。白色のシャコガイを素材とした製品の製作工程（製作技術）を窺うことができる資料である。

第11表 貝輪の観察表

法量単位：長さcm、重量g

番号	分類	事項	長軸	短軸	厚み	重量	出土地点
第6図 1	A	半輪の一端側に孔を有する。孔は両側面から穿つ。孔はすり鉢状で最大孔径約0.5cm、貫通する内部孔径約0.2cm。他方の半輪端部は研磨痕の状況から当初の形を残しているものとみられる。研磨は良好で手触りが良好である。	6.5	1	0.4	4	45,d/72-78
2	"	半輪状の製品である。両端部ともに欠落しているため、孔の有無については明らかでない。ただし、器面の研磨は良好で明らかに同質の貝製品の一部であることは間違いない。	5.5	1.1	0.4	4	35,e/36-42
3	"	半輪状の一端に小孔を残す製品である。端部はいずれも破損している。孔部の縁辺や内面は極めて研磨が良好である。また、表面も研磨が認められるが、本来貝が有する凹凸面が深いこともあり、徹底はされてない。孔はすり鉢状で最大孔径約0.3cm、貫通する内部孔径約0.15cm。	5.4	1.3	0.4	5	36,c/60-66
4	"	二枚貝の湾曲を活かした垂れ飾りである。両端は欠落しているものの、摩擦面になり、一つの製品とみられる。表裏面ともに研磨がなされ光沢をみせる。ただ、表面は貝本来有している螺肋のため研磨面がおよぼさず色がついたくぼみをなしている。	6.6	1.1	0.5	7	34,c/66-72
5	B	二枚貝の外周をそのまま組み組んだ貝輪。資料は全体に研磨が加わり、その他に孔や挟り痕は観察されないが、製品の一部と判断される。	5.5	1.6	0.4	5	30,d/90-96
6	"	破損した以外は極めて手触り感が良好な製品である。細い側の端部は成形され、この部分は完全形となっている。逆の端部側は欠落しているため、垂れ飾りとするならばこの側に細工がなされたものと推測される。	6.2	1.6	0.5	5	41,f/48-54
7	C	大形貝で貝種は不明である。厚みがあり白色をおびる。研磨が丁寧になされている。両端部に小孔が穿たれている。一端は残りがよく、端部整形の様子が分かる資料である。孔はすり鉢状で最大孔径約0.8cm、貫通する内部孔径約0.26cm。外観はイノシシの牙状を呈する。	7.3	1.2	0.6	15	43,f/54-60
8	A	両端部とも欠損しているが、一部端部に孔の一部が認められる。孔径約0.35cm。表面の肋は深いためのこざれているが製品の研磨は良好である。	4.2	1.1	0.4	3	d/42-48
9	"	貝厚みがあり白色をおびることから、シャコガイを素材したのであろうか。研磨が丁寧になされている。一端部は成形され、他方は欠落しているが、垂飾りの一部品と思われる。	3.7	1.2	0.8	1	37,d/90-96
第7図 1	A	幅に厚みがあり、全体観ではやや棒状の製品である。これまでの製品同様に自然貝の肋は残るが研磨が全体になされたものである。一端は丁寧な仕上げとなる。他側が欠落のため短くなっている。	4.7	1.1	0.6	6	31,e/18-24
2	"	破損はしているが、両端に孔のある資料である。端部は完全形で成形されている。製品は扁平である。	4.5	1.2	0.2	2	26,d/18-24
3	D	二枚貝の殻頂部付近を取り入れたもので、半輪状になる。両端部に直径が約0.2cmの小孔を穿つ。表側に赤褐色の表皮色を残すが、裏面を含めて全体に真珠光沢を呈する。	6.5	1.2	0.3	12	28,0/54-60
4	B	二枚貝の輪郭を活かした腕輪である。ただし、半分を欠落している。破損部には孔や挟り痕跡はみられない。輪の内面縁は摩擦して手触りはすべすべしている。孔の直径が推算3.45cmをなす。	5.8	1.2	0.3	9	18,b/24-30
5	C	本製品も極めて薄手の製品である。両端部側が欠損しているが、いずれ側にも孔が存在していたことが分かる資料である。	5.7	1.1	0.6	10	33,f/6-12
6	E	サラサバティを素材とする。丁寧に研磨がなされ、色調は白色で、一端部に孔が一つ残されている。孔径約0.5cmをはかる。	6.3	1.4	1.6	10	46,f/42-48
7	"	サラサバティを素材とする。自然の赤褐色の縞状の色素が残されている。半輪状である。本貝塚の出土資料では最も大きい。一端部は成形されている、他方は欠落している。垂れ飾り品か。	9.1	1.6	1.2	26	29,o/72-78

③ 不明製品 (第8図2、4、5～7、9、10) (写真4の8～10、13、14、15)

形状が細片のため特定できないものをここに含めた。総計7点である。

2-4. 加工残欠品 (第9図) (写真6の8、9)

製品ではないが、貝製品を加工する段階の残欠資料である。技術の一端を知ることができる貝殻として取り上げた。2点の大形のアンボンクロザメで、螺頭部は欠落しているが、その部分に近い体層部に、水平方向に一直線に擦り切り痕を残すものである。イスモガイ製の符状貝製品や獣形貝製品などの素材を切り取り、廃棄した残欠とみられる。

第12表 その他製品の観察表

第8図 1	へら状 製品	クロチョウガイを素材にした靴べら状の製品である。巨視的には長方形であるが、長軸の一端側は両角が円く成形され、切込みが線状に施されている。真珠層のある内面側は5本と数が多く、外面側は一本になっている。	8.9	4.7	0.4	38	80,h/18-24
2	札状貝 製品	ホラガイを素材にした札状にした製品。ただし、全体の形状については細片のため不明である。薄手で、面的には平面の研磨は顕著ではない。白色を呈する。	5.4	2.3	0.2	8	61,e/36-42
3	鏢状貝 製品	アコヤガイの縁辺に沿うように半環状にした製品で、帽子の鏢状を呈する。湾曲した内縁縁は丁寧な研磨が加えられ、滑らかである。両端部は欠落しているため、その収まり状況については不明。表面は自然貝の褐色襞がそのまま残されている。他方内面についても、真珠光沢面になっている。	7.9	3.1	0.2	17	48,c/24-30
4	破片	クロチョウガイを素材にした製品で、細片の全体の形は不明。現状は刀子の様な形にもみられる。ただし、表裏面、側面ともに研磨が加えられているが、付刃はなされてない。色調は赤黒色をおび、一面のみ光沢がみられる。	3.7	1.4	0.3	3	38,g/142-148
5	札状貝 製品	札状の一部細片。一側縁に加工痕がみられることで、掲載することにした。	3.8	3.1	0.8	15	59,f/66-72
6	札状貝 製品	シャコガイ原形を残す。表面に強い研磨が行われている。札状製品のコアをなすものとみられる。	8.6	5.2	0.7	52	60,d/96-102
7	破片	アコヤガイ製品一部細片。一側縁に加工痕がみられることで、掲載することにした。	0.4	1.8	0.2	3	—
8	破片	製品の細片で全体形は不明である。長軸の両端側には孔の痕が残り、有孔製品であることが認識できる。また、器面は被熱の痕があり黒色もおびる。	2.2	0.1	0.5	2	40,f/12-18
9	札状貝 製品	シャコガイを素材にした製品。ただし、全体の形状については破損が著したため不明である。薄手で、側面に研磨痕がみられ、また、破損面には孔の痕が確認され、札状をなしていたものと推測される。色調は白色を呈する。	6.5	2.5	0.4	2.84	—
10	破片	素材である貝に真珠層面が認められる。長軸の一側縁部分が製品としての研磨部分が残っている。また、この部分に抉り痕も認められる。	4.9	2	0.3	5	54,F/60-66
第9図 1	未製品	資料は製品ではない。アンボンクロザメ貝の大層面に縦位に、摺り切り溝が残る資料である。利用部位と製作技法を知る資料となるもので、殻長軸に縦の長さが約9.4cm、溝幅は約0.5cmである。溝の断面は薬研彫りで、ある程度の深さで行い、その後は割りとった痕が認識できる。	9.4	3.8	0.4	68	78,D/12-18
2	未製品	上記資料同様なアンボンクロザメ貝で、製作痕が残る資料。薬研彫が長軸にまっすぐに一本残る。幅約0.35cm、深さ0.2cm。	7.8	3.4	0.55	49	79,D/72-78



### Ⅲ. おわりに

以上、熱田原貝塚出土の貝製品と骨製品について報告した。これら製品の所属は伊波式土器の伴出から縄文後期に位置づけられる標識的資料となるもので、今後の研究に大いに役だつものと思われる。

骨製品は生産量は少ないものの豊かな内容を有している。実用品の骨錐に属せしめたものは、針の様に細長いタイプと、逆に軸が太身になるタイプであった。とくに前者は形状と重量から装飾品的な要素が強いもので、簪や笄の様な用途性が窺われる。一方実用品に対して装飾に関して大別したものは腕輪、垂飾、札状製品類である。腕輪はイノシシなどの半輪の牙を、複数連結して輪にしたタイプも含まれよう、出土量が顕著である。垂飾にはステック状製品、サメ歯、刷毛具状製品、彫刻札形製品をまとめた。いわばサメの歯そのものを示すペンダントと、刷毛具状をした極端に抽象化した製品が存在する。また、形は違うが平面部に斜線を入れ、外周に蝶形状の刻みを施す札状製品がある。これは後述の貝製品にも関連するものであり、さらにうま市古我地原遺跡の石製品にも類似するものである。さらに時代の降りた弥生時代の広田遺跡にみられる貝製札製品にも共通するところがあり、骨、石、貝とそのバリエーションの広がりをも有している。なお、この現象は前述のサメ歯製品にも共通するところで、日本列島の縄文社会に強く支持されたデザインとして捉えることができる。

貝製品は骨製品以上に豊富な出土量、種類であった。実用品は3種類、装飾品が3種類に大別した。実用品は容器としての匙、利器としての鎌、貝錘である。ヤコウガイ匙の装飾の施された登場が縄文後期にあることを示す例である。この匙（容器）は後のうま時代（弥生～平安平行時期）や歴史時代まで存続し、匙（柄杓）文化の精神性の深さを鮮明にしている。貝鎌は平面形が二等辺三角形をなすが、一つは著しく細く長いタイプと、やや底辺が短いタイプがあり、前者は石製鎌に類似する点でその出現背景が早い段階にあることを示唆している。小形の二枚貝有孔製品は粗孔である点も漁網錘とみている点である。

装飾品として認識したのは、腕輪、垂飾、その他の3種である。骨製品の属性に近いところがある。腕輪は巻貝、二枚貝を素材とするが、半輪である点ではイノシシの牙製品に形を準ずるもので、複数組み合わせて使用することでは、牙製品を補完するような出現のありかたである。

垂飾は9種類に細分されるほどにバリエーションに富むものである。貝小玉にあたるイモガイなどの殻頂部を取り込んだものと、ほぼ水平に面取りした貝ビーズ製品で後者の研磨技法は徹底した擦り切り研磨を加えたものである。貝鎌模造製品としたものは、前述の腕輪に共通するもので、サメ歯をより抽象化したものとして捉えられる。自然の造形である三角の先の鋭さに精神性を窺うことができまいか。ステック状製品としては、線刻されたパイプウニの棘製品が目目される。ことに柱状部分の表面に線刻で菱形を重ねて描く模様が、縄文後期の土器型式文様にも共通し、また、次代のうま時代（弥生～平安平行時期）に属する貝札の文様にもつながるもので、当代南島の文様造形のパターンとして標識化できる一つである。造形の系譜については判然としないアコヤガイ製品は前述の骨製品

同様に蝶形に由来をもつものではなからうか。また、今回手元に存在しないイモガイを素材にした獣形製品はやはり注目したい。全体の姿に意味を有するものではあろうが、イモガイの加工途上品の存在をみると、その構成要素である刻みと大形貝にも大きな意義を含ませているように思われる。

第13表 沖縄諸島の先史時代編年

時代区分	土器形式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の編年資料	備考
縄文時代	草創期		条線文土器 (11000 ~ 8500年前) 押引文土器 (9000 ~ 8000年前)	
	早期	野園第4群 ヤブチ式土器 東原式土器	} 爪形文土器	ヤブチ式 6670 ± 140Y. B. P. 東原式 6450 ± 140Y. B. P.
	前期	条痕文土器 室川下層式土器 曾畑式土器 神野A式土器 神野B式土器	条痕文土器 曾畑式土器	曾畑式 (渡具知東原) 4880 ± 130Y. B. P.
	中期	面縄前庭Ⅰ式土器 ← 面縄前庭Ⅱ式土器 ← 面縄前庭Ⅲ式土器 ← 面縄前庭Ⅳ式土器 ← 面縄前庭Ⅴ式土器 ←	旧具志川A式 旧具志川B式 旧具志川C式 旧神野C式 旧面縄前庭式	
	後期	神野D式土器 神野E式土器 伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器		伊波式 (熱田原) 3370 ± 80Y. B. P. 伊波式 (室川) 3600 ± 90Y. B. P. ※
	晩期	室川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		入佐式並行 黒川式土器
	うるま時代	I 真栄里貝塚	板付Ⅱ式土器 亀ノ甲類似土器	
II 具志原式土器		山ノ口式土器		弥生期
III アカジャンガー式		免田式土器	アカジャンガー式は 中津野式並行か?	弥生期
IV フェンサ下層式土器			類須恵器	古墳時代 平安時代

◎ 「フェンサ下層式は城時代初期」とする見解もある。

## 謝辞

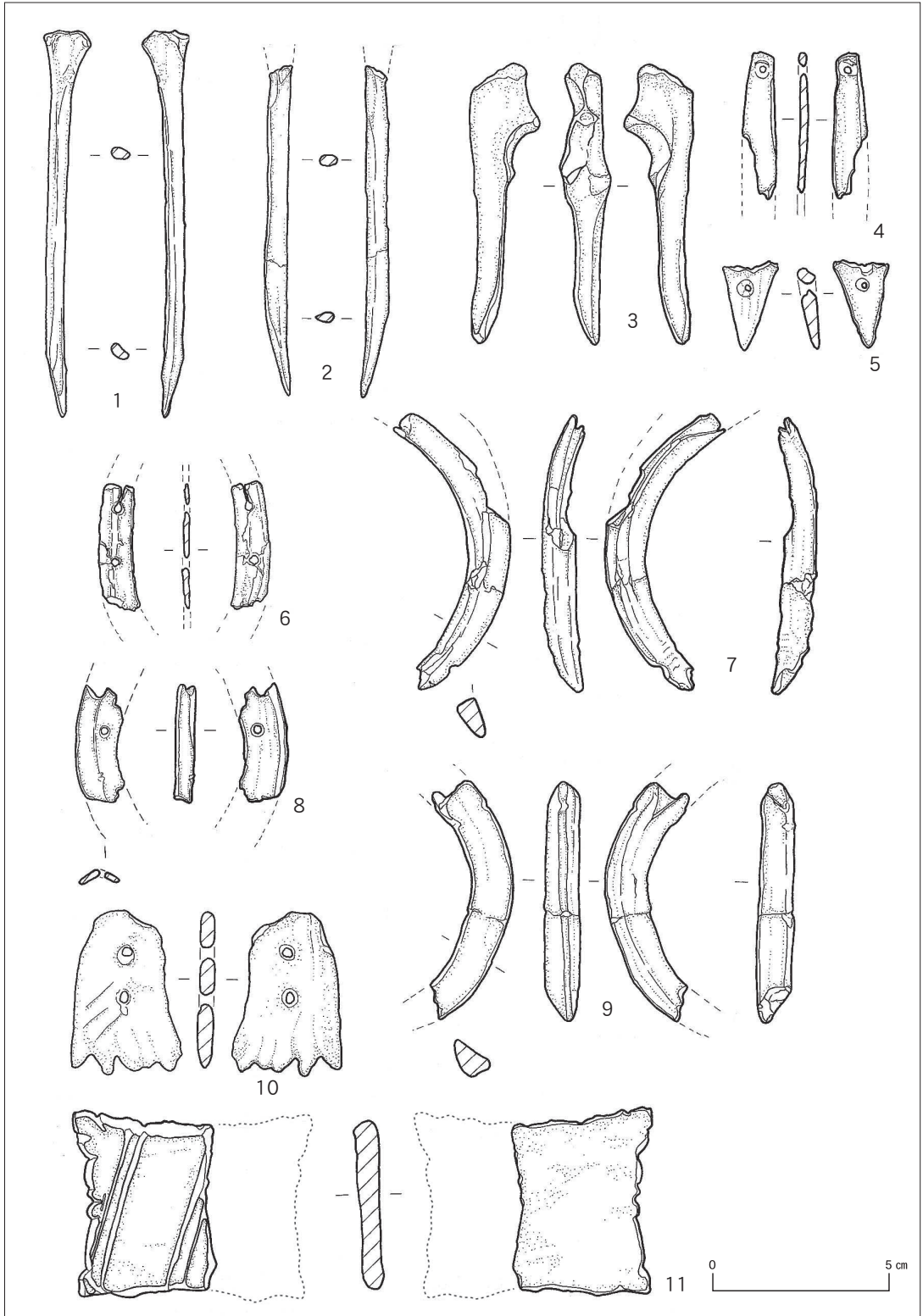
出土資料の整理にあたり、大城秀子氏（元南城市教育委員会）には熱田原貝塚の石器に続き、今回の骨・貝製品報告でも多大な支援を頂いた。また、最終段階の図版作成では考古学ゼミ学生の楠瀬康大君（沖縄国際大学総合文化学部社会文化学化）に協力を得た。末筆ではあるがここに記して感謝したい。

## 参考文献

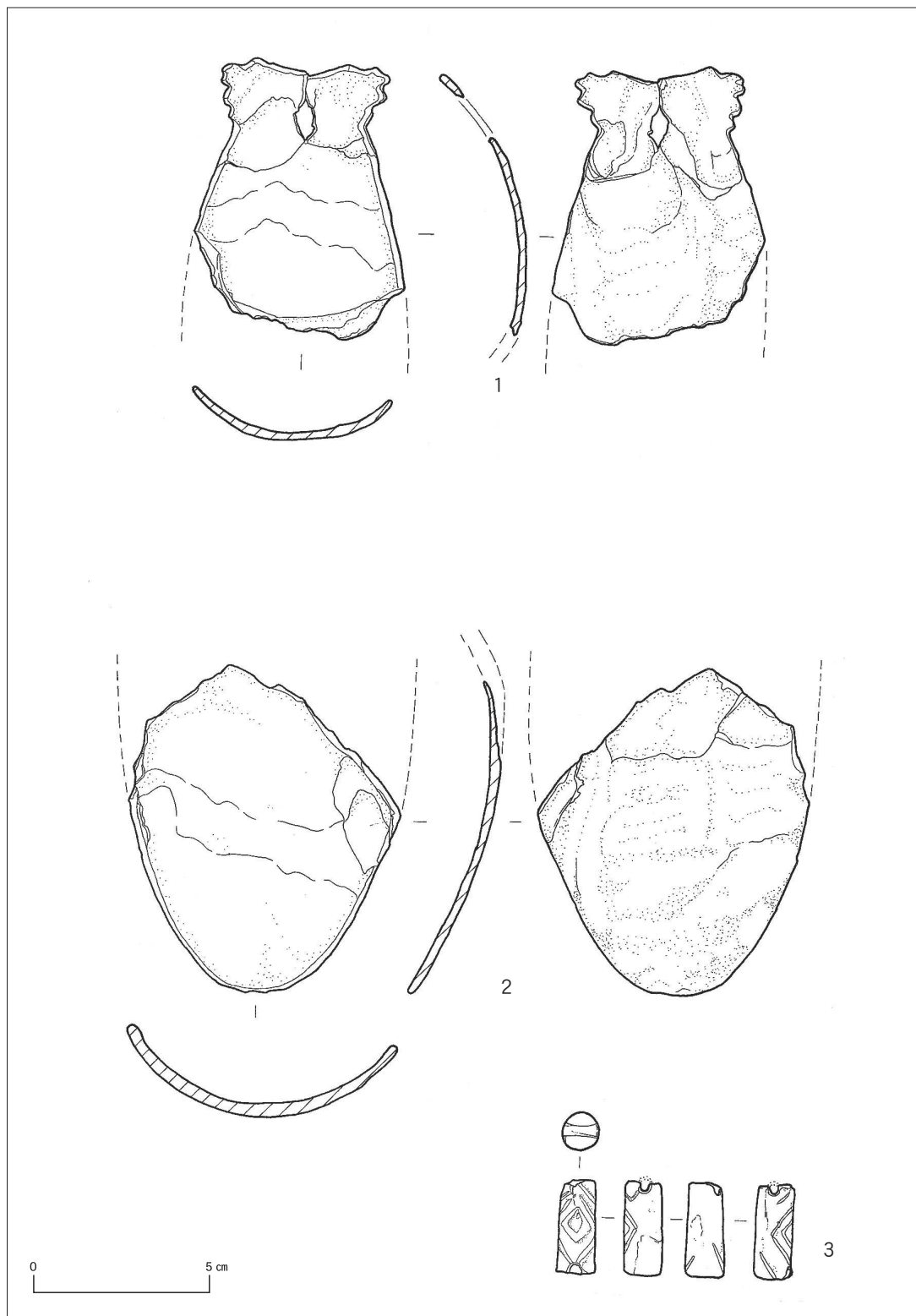
註1. Meighan, C.W.・高宮廣衛「知念熱田原貝塚発掘概況」『文化財要覧 1958年版』琉球政府文化

財保護委員会 1958 年

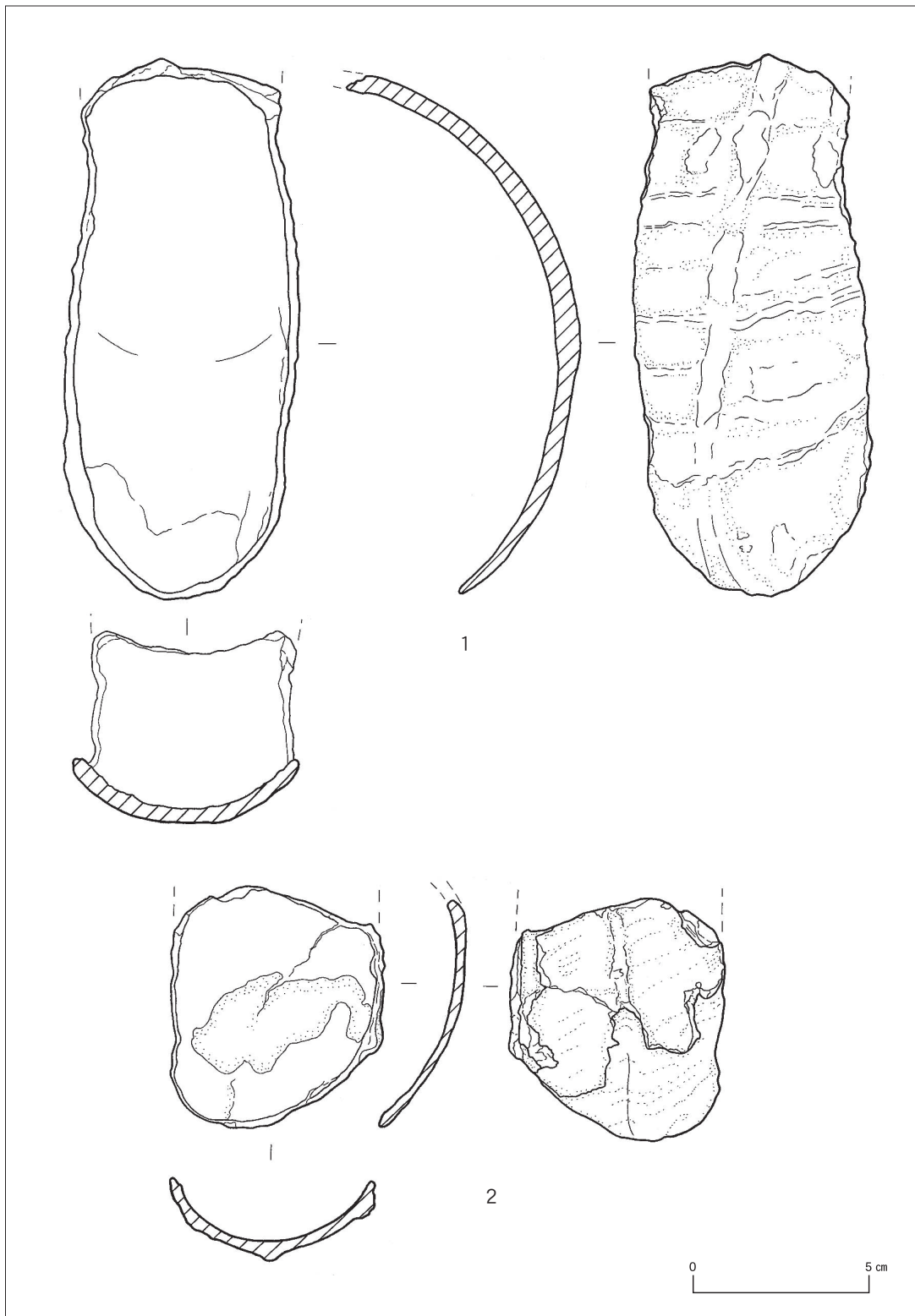
- 註 2. 高宮廣衛・Meighan,C.W. 「熱田原貝塚の貝類と獣魚骨」『沖繩国際大学文学部紀要社会学科編』  
第 19 卷第 1・2 合併号 沖繩国際大学文学部 1992 年
- 註 3. 高宮廣衛・Meighan,C.W. 「熱田原貝塚の土器」『沖繩国際大学文学部紀要社会学科編』第 1 卷  
第 1 号 沖繩国際大学文学部 1973 年
- 註 4. 高宮廣衛 「9 熱田原貝塚の石器」〔南島考古雜録Ⅲ〕『沖繩国際大学総合学術研究紀要』第 5 卷  
第 1 号 沖繩国際大学総合学術学会 2001 年
- 註 5. 知念村教育委員会『熱田原貝塚調査報告書』知念村文化財調査報告書第 10 集 2002 年
- 註 6. 『九州の縄文時代装身具』第 15 回九州縄文研究会沖繩大会 2005 年
- 註 7. 山崎真治・黒住耐二・大城秀子 「沖繩県南城市熱田原貝塚出土貝刃の製作技術」『日本考古学』  
第 38 号 日本考古学会 33～46 頁 2014 年
- 註 8. 山崎真治 「沖繩先史文化起源論をめぐる近年の動向と課題」『南島考古』No.34 沖繩考古学  
会 2015 年



第1図 熱田原貝塚出土の骨製品

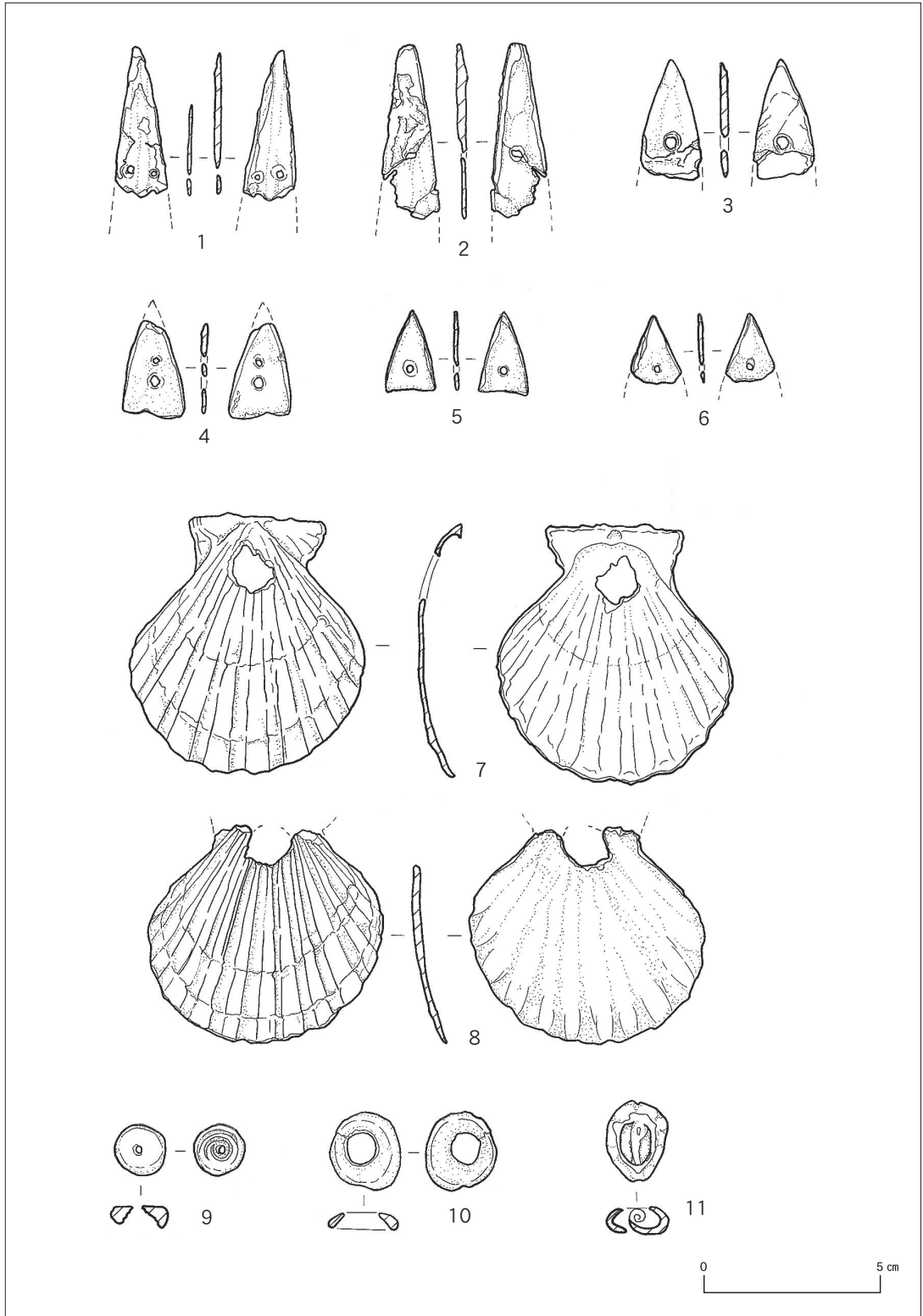


第2図 熱田原貝塚出土の貝製品1、2 パイウニ製品3

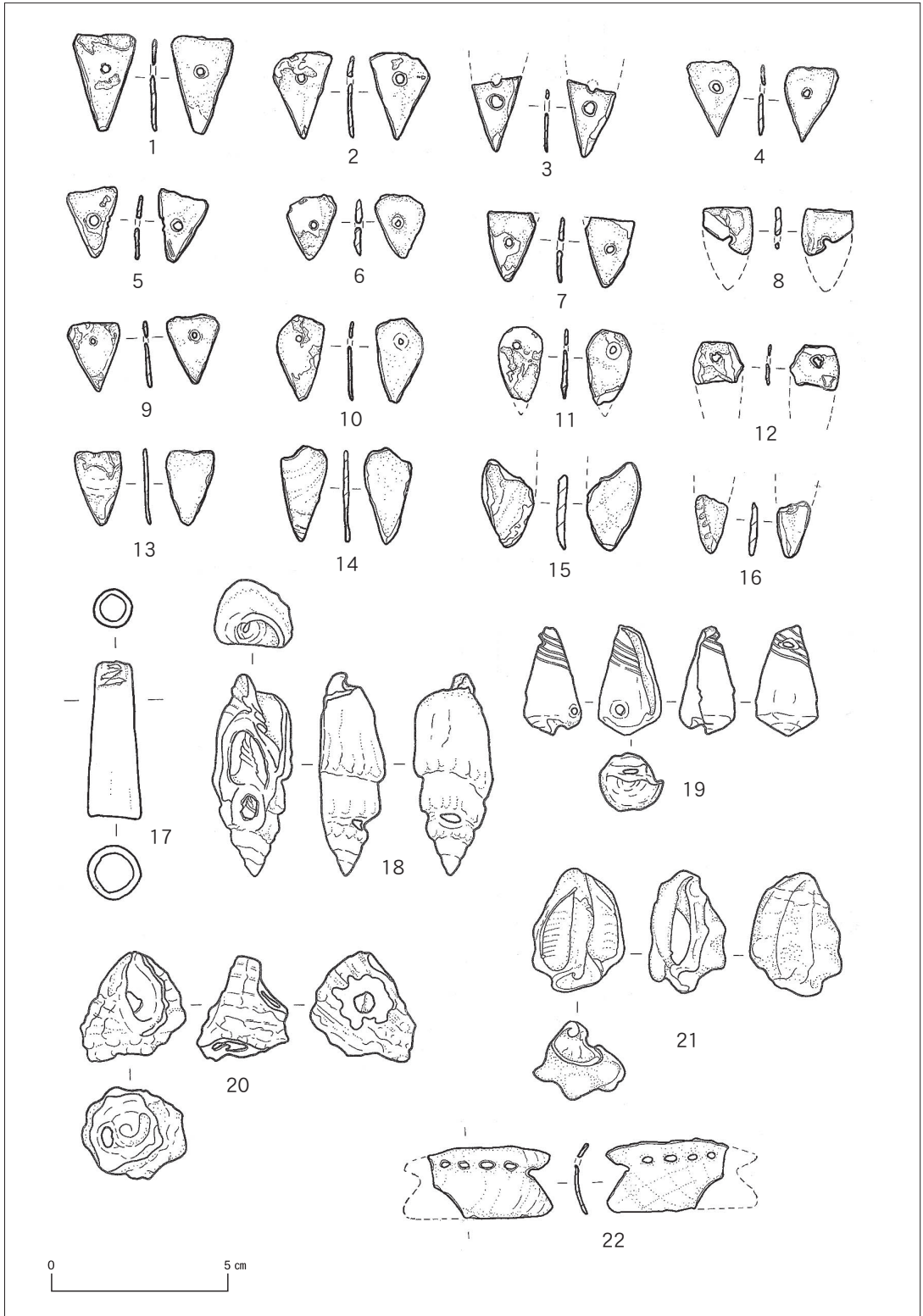


第3図 熱田原貝塚出土の貝製品

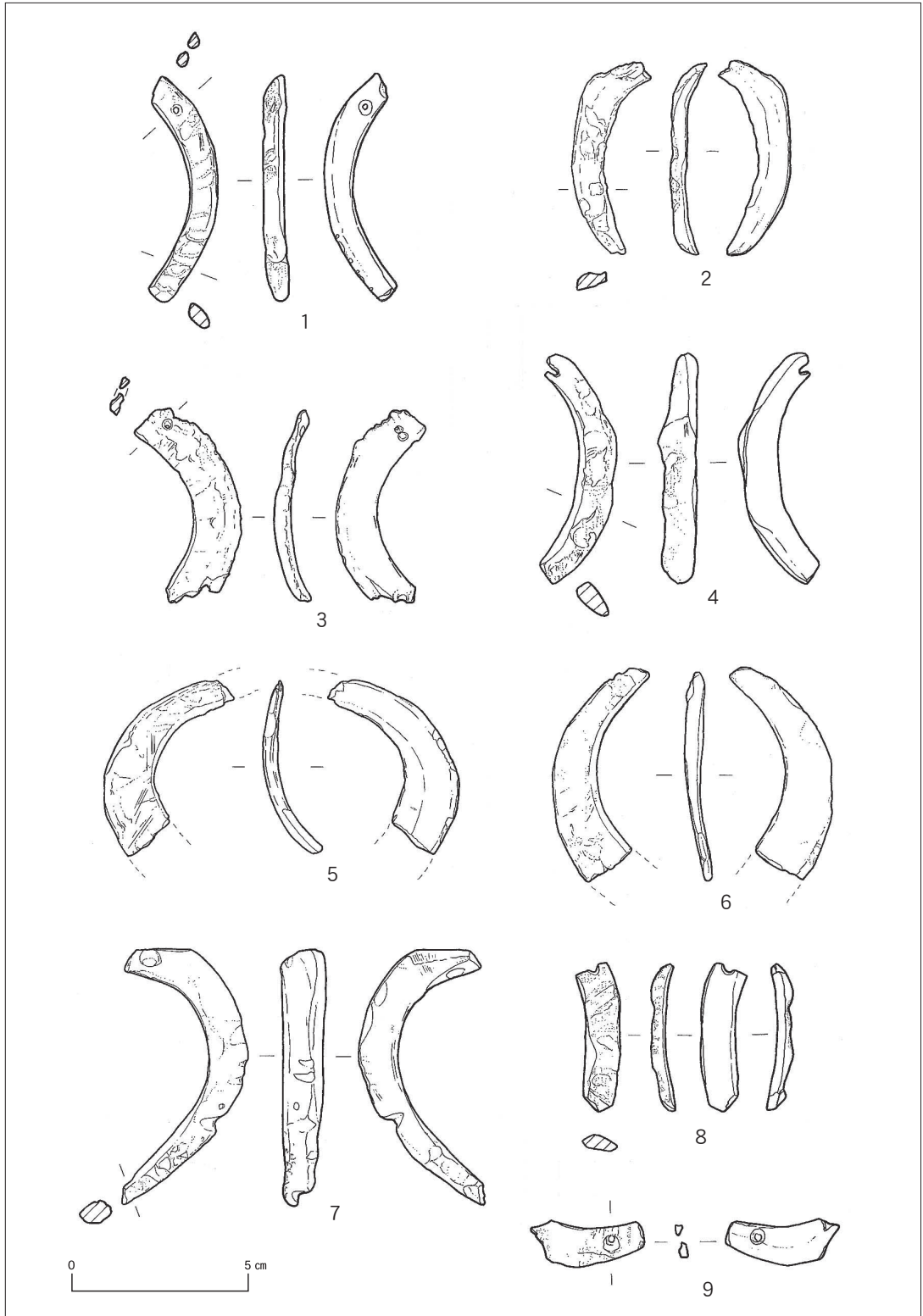




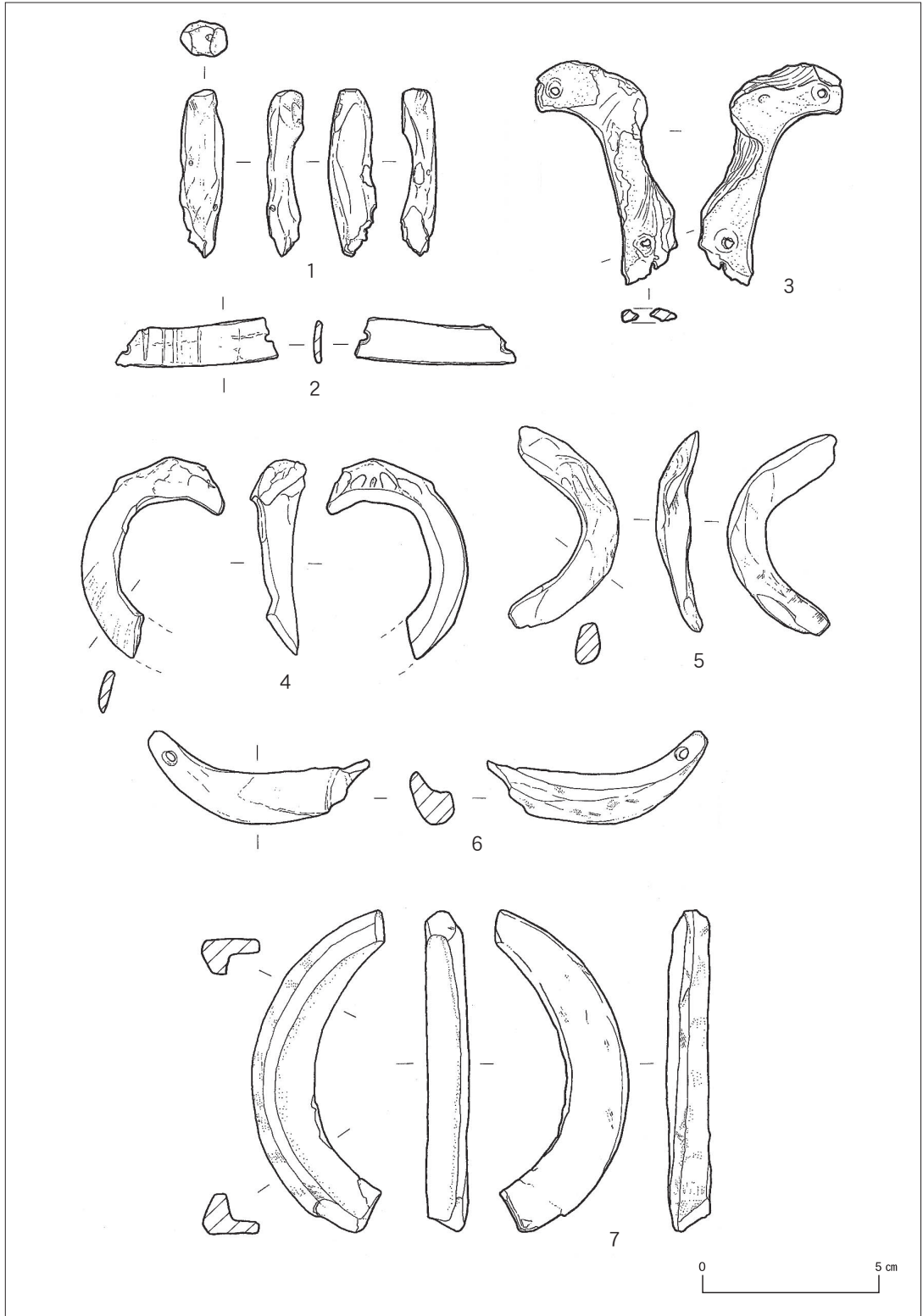
第4図 熱田原貝塚出土の貝製品



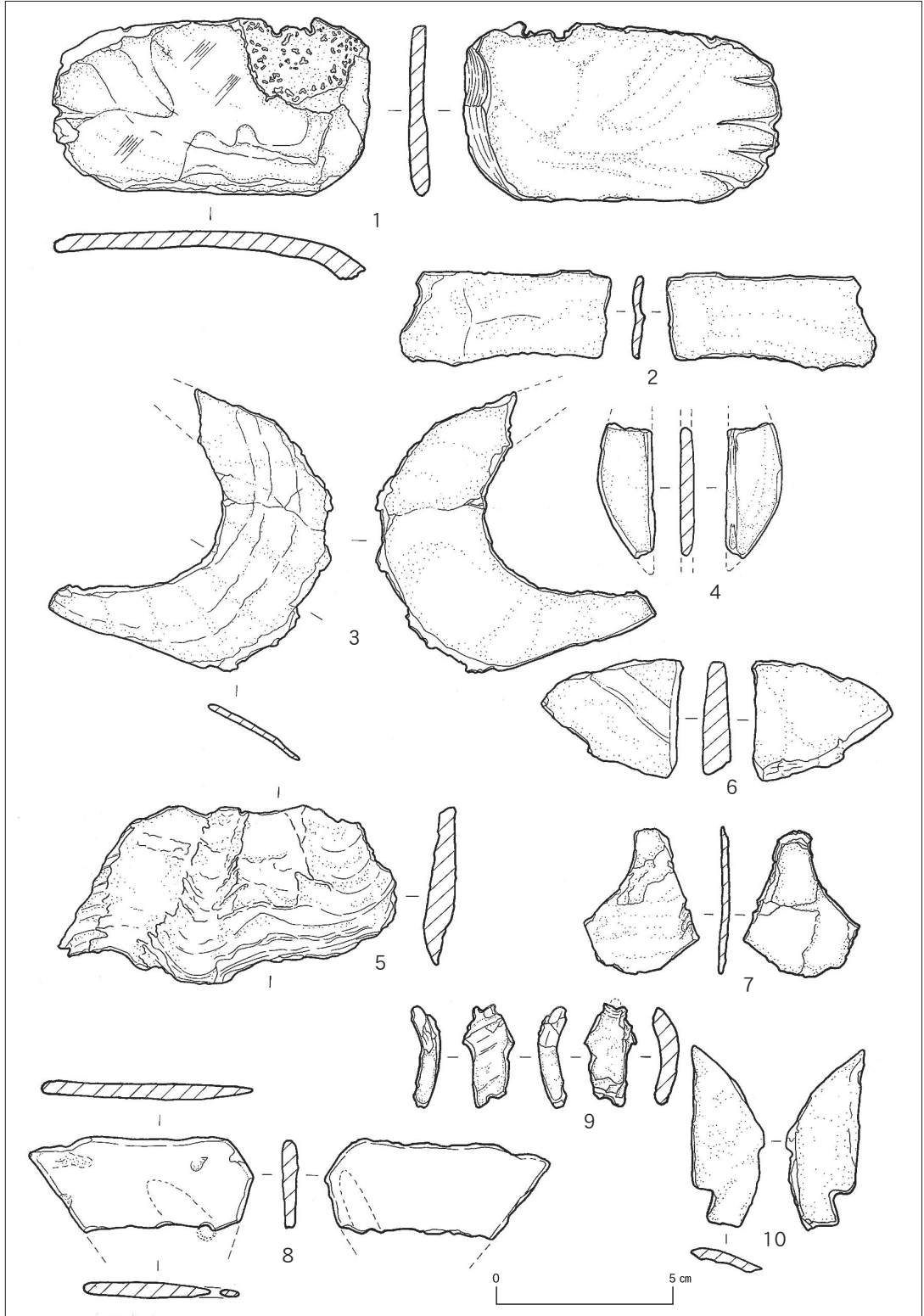
第5図 熱田原貝塚出土の貝製品



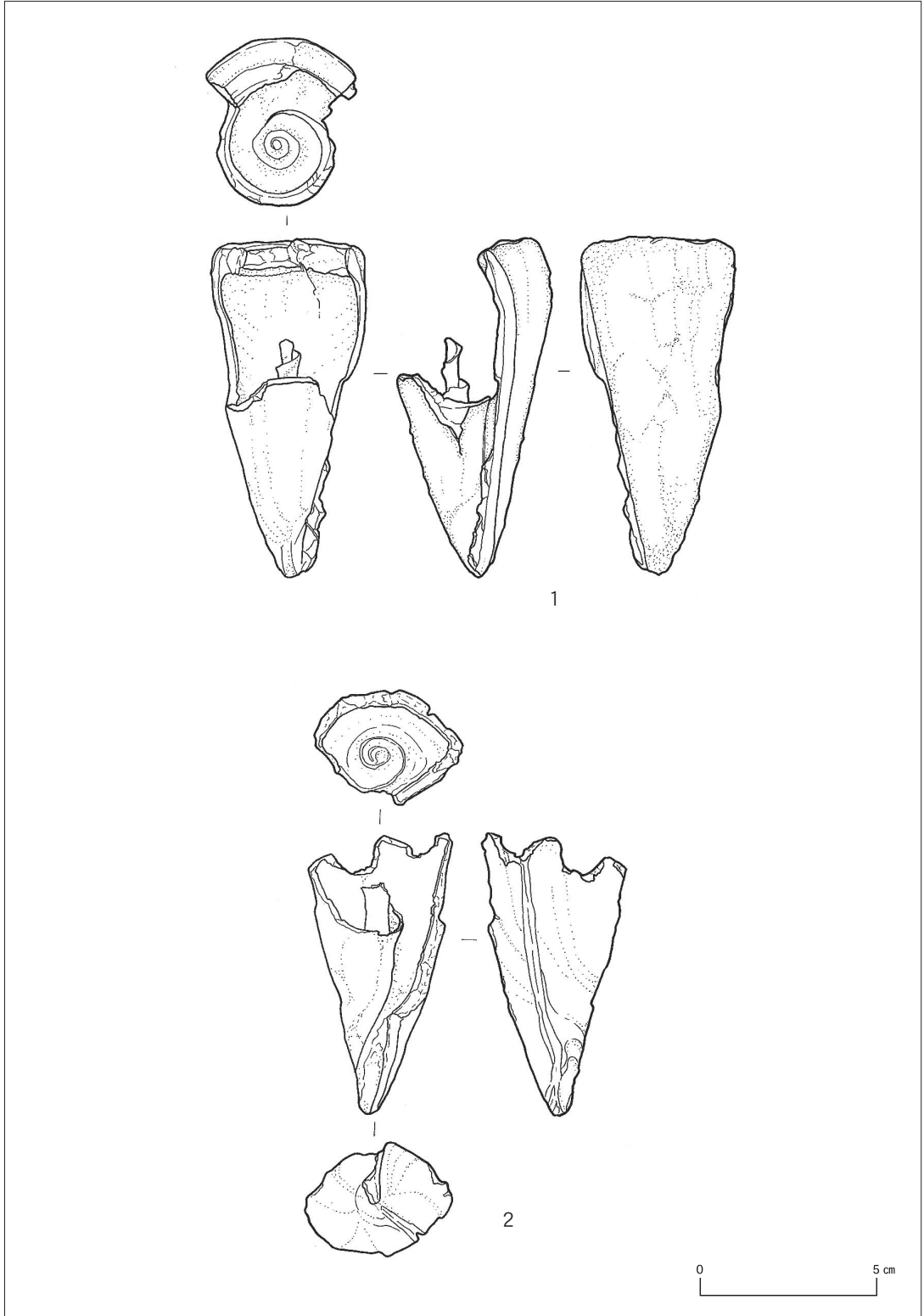
第6図 熱田原貝塚出土の貝製品



第7図 熱田原貝塚出土の貝製品



第8図 熱田原貝塚出土の貝製品



第9図 熱田原貝塚出土の貝製品



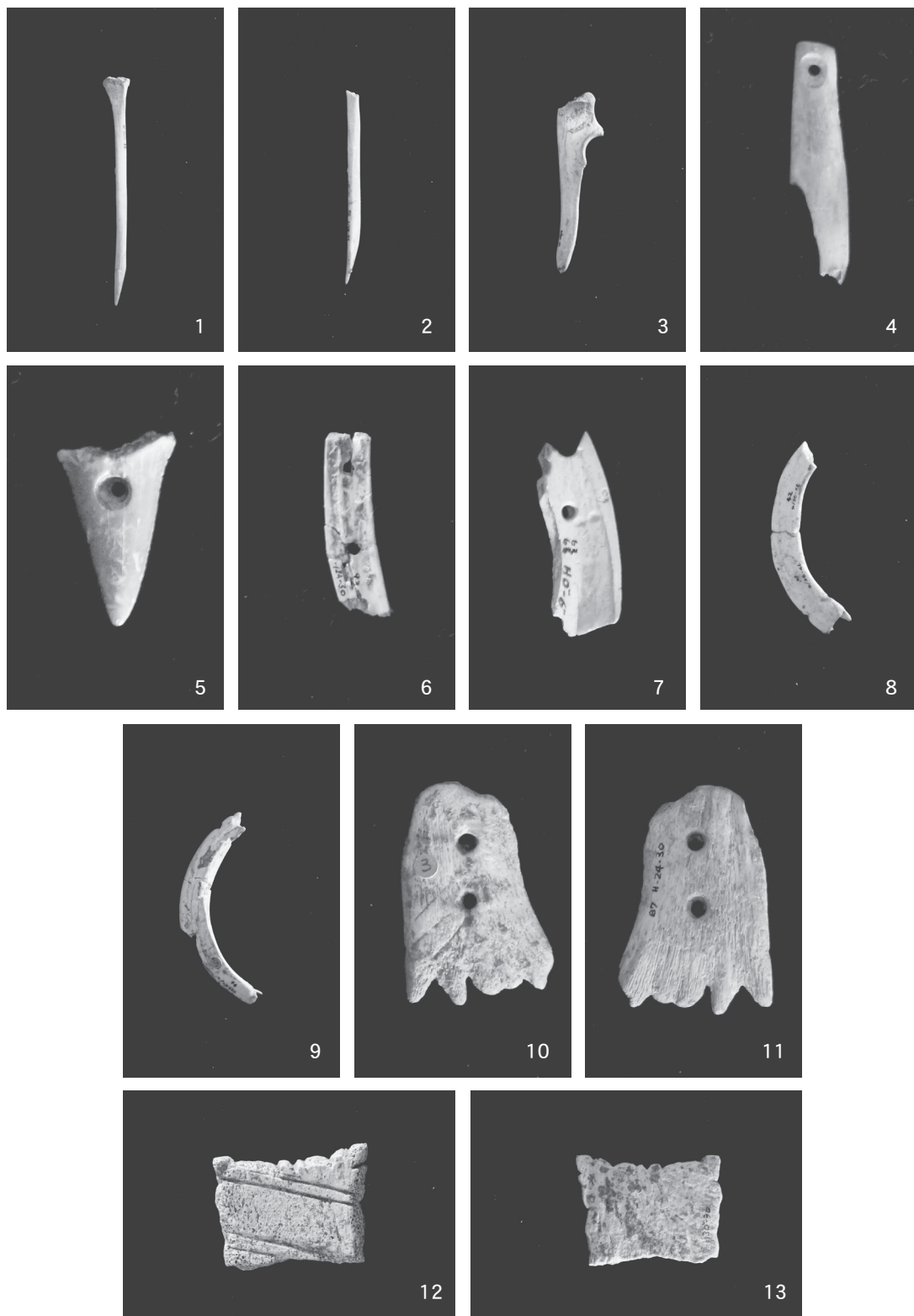


写真1 熱田原貝塚出土の骨製品

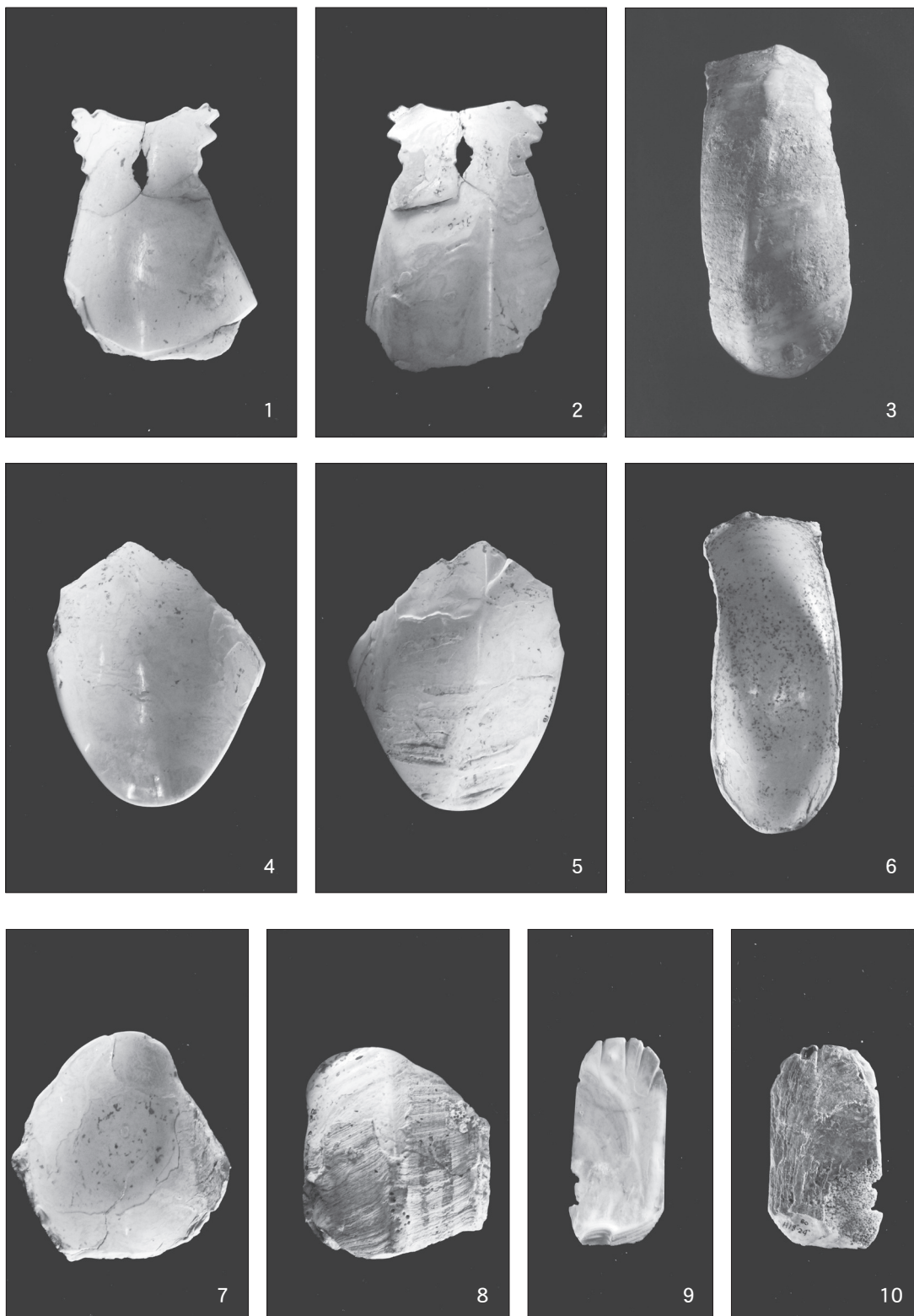


写真2 熱田原貝塚出土の貝製品

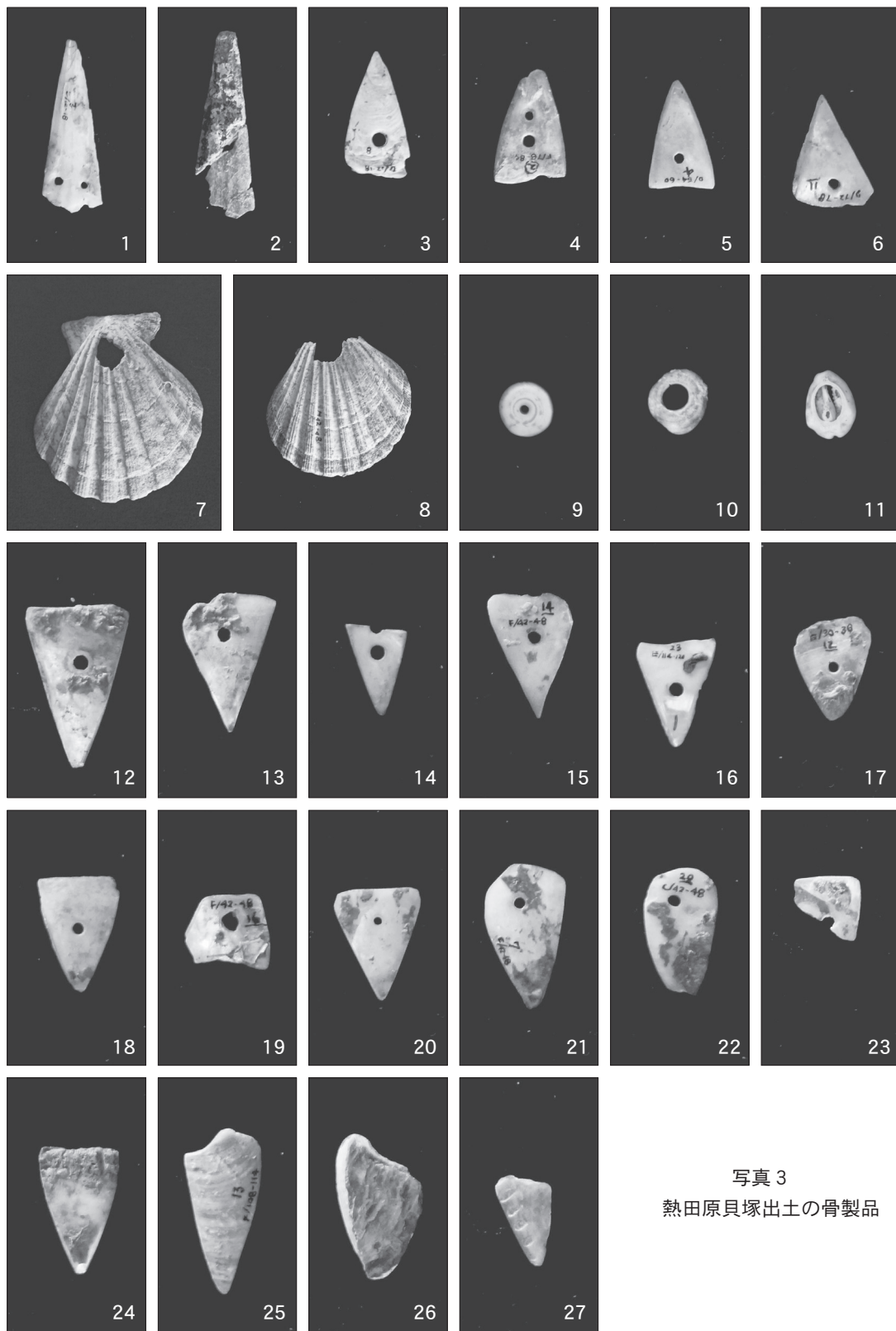


写真3  
熱田原貝塚出土の骨製品

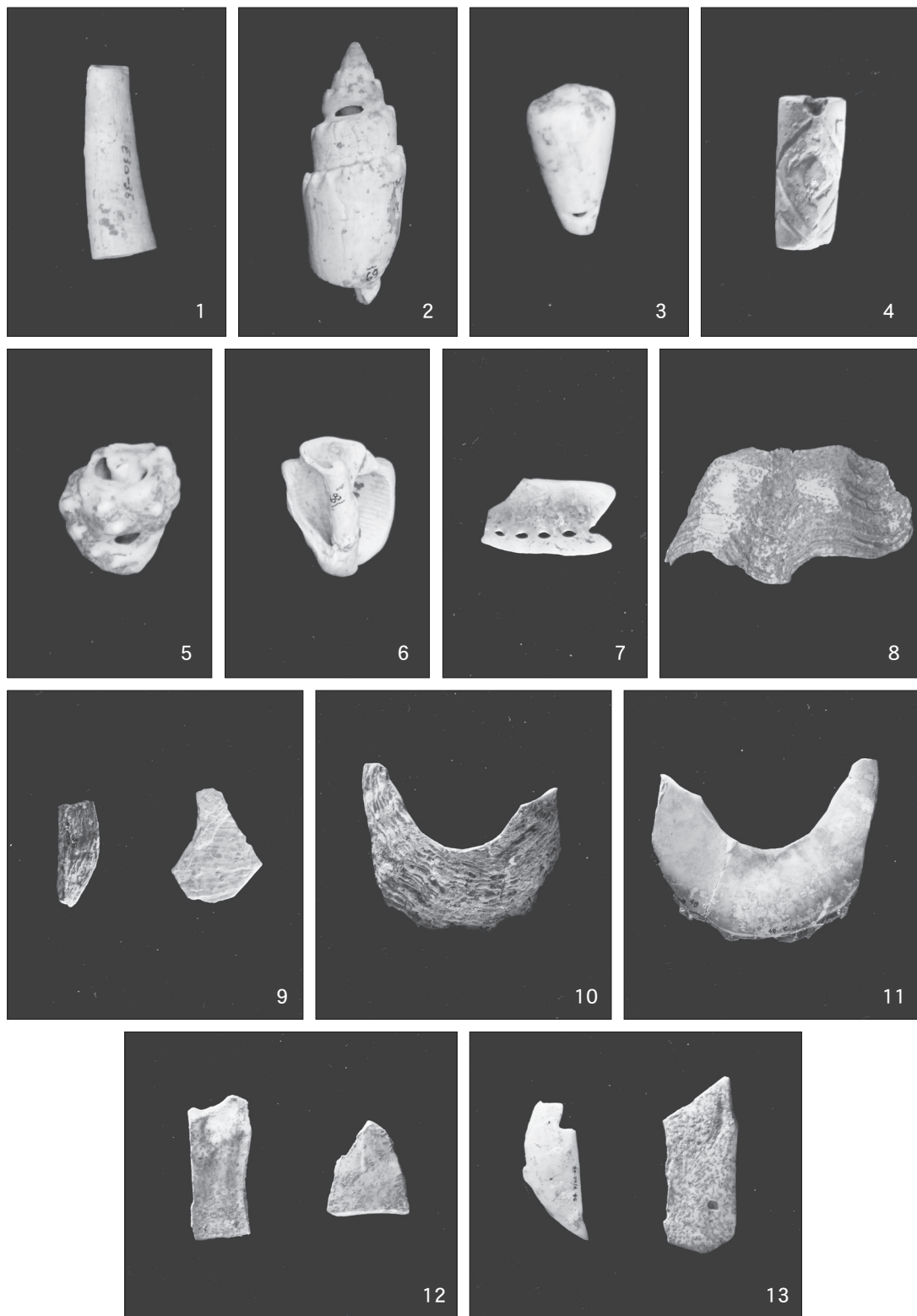


写真4 熱田原貝塚出土の貝製品

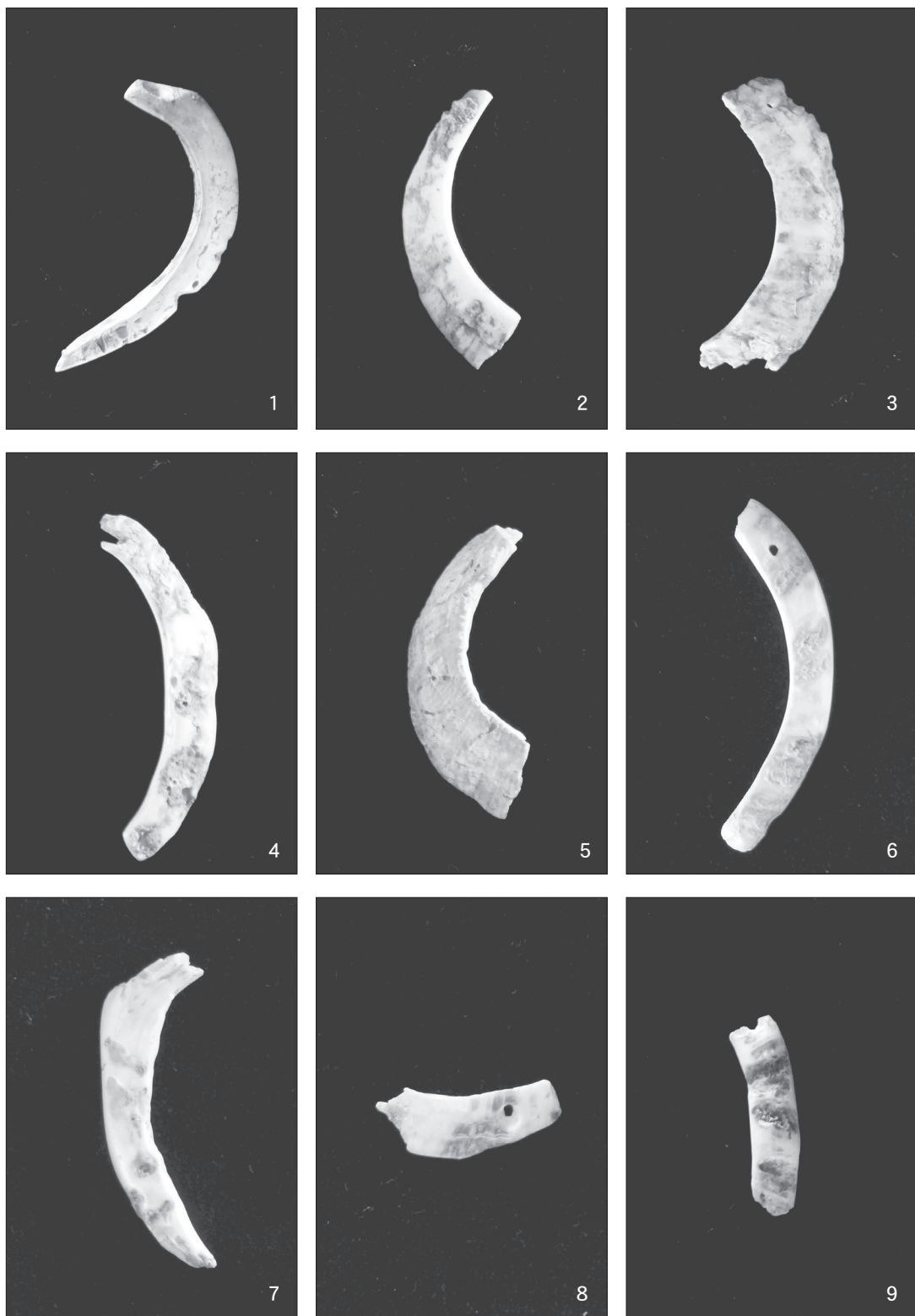


写真5 熱田原貝塚出土の貝製品

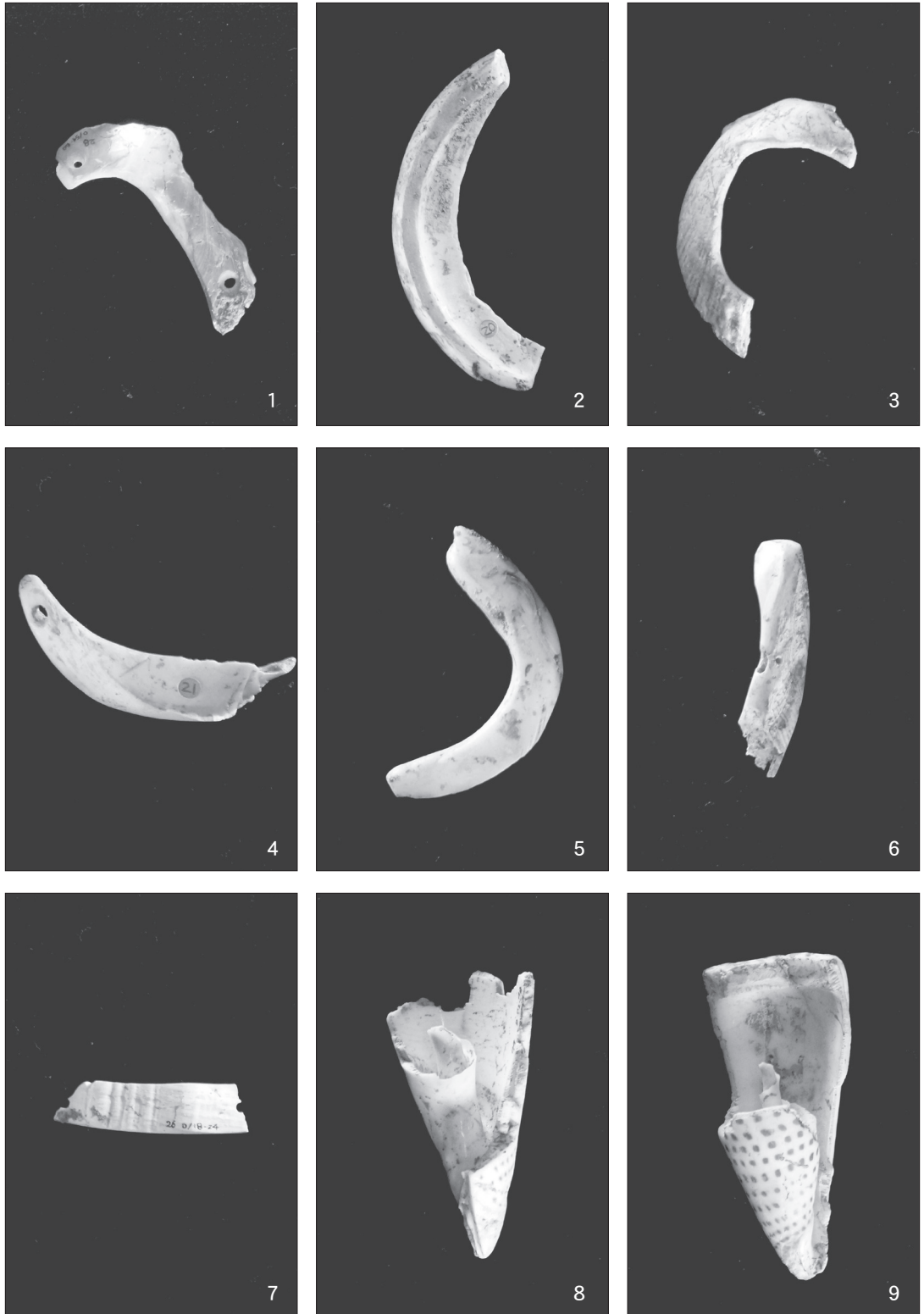


写真6 熱田原貝塚出土の貝製品



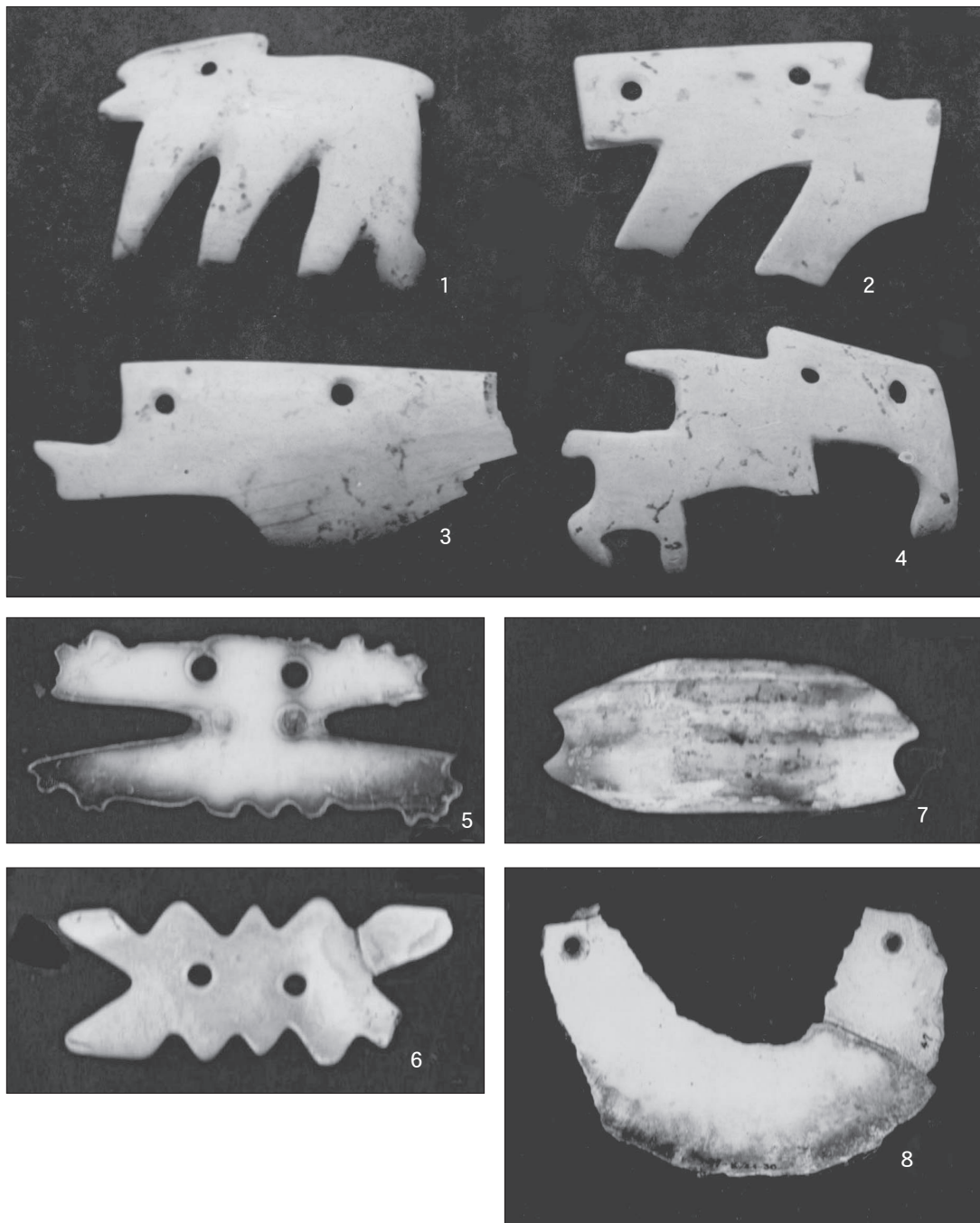


写真7 熱田原貝塚出土の貝製品（複写） C.W.Meighan 博士所蔵